

## 【書評】

ライオネル・ロビンズ (小峯 敦・大槻忠史 訳)

### 『経済学の本質と意義』

京都大学学術出版会, 2016年, viii + 218頁

本書は、Lionel Robbins, *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science* 初版 (1932) の翻訳である。第2版 (1935) の訳書は、1957年に出版されているが (中山伊知郎監修・辻六兵衛訳、東洋経済新報社)、初版の邦訳は本書が初めてである。本書の功績は、初版の初めての訳というだけでなく、初版から第2版への主要な変更点が訳注で示されていること、また、ロビンズが言及している文献の書誌情報が「参考文献一覧」として巻末に掲載されていること、こうした点にも認められる。

初版の章立ては以下の通りである。

第1章 経済学の主題

第2章 目的と手段

第3章 経済「量」の相対性

第4章 経済学の一般法則における本質

第5章 経済学の一般法則と現実

第6章 経済学の意義

この章立ては、第2版でも変わっていない。最も大きく変更されたのは、第4章である。第4章の7つの節のうち4つの節の題目が変更された。また、第5章では1つの節題が変わるとともに、新たな節が追加され、第6章では2つの節が合体された。これに伴って加筆修正も行われているが、以下に述べるような本書の基本的な主張は維持されていると見てよい。

ロビンズのこの著作が経済学方法論の古典

であることは、改めて言うまでもない。その第一の貢献は、経済学の「稀少性定義」を提唱し、経済学の課題と領域について有力な提案を行ったことにある。稀少性定義によれば、「経済学は、代替的用途を持つ稀少な手段と、目的との間にある関係性としての人間行動を研究する科学である」。ロビンズがJ. S. ミルに倣って述べているように、ある科学の定義は、科学の創設に先立つものではなく、すでに存在する科学を境界線で囲うために与えられる。稀少性定義もまた、この頃すでに進行していた研究が含意していた考え方を、自覚的に取り出したものということができる。その40年ほど前には、J. N. ケインズが『経済学の領域と方法』(1891)の冒頭で、「経済的」という言葉は、「目的に対する手段の理性的な適応」を意味する言葉としても使用されるが、一般的には「富」に対応する形容詞として用いられるとして、経済学は富の現象に関する一群の学説であると述べていた。ロビンズの頃までに、経済学の課題と領域についての考えが、転換したのである。もちろん、こうした転換に批判的な見解は、その後も現れる。例えばポランニーは、「経済的」という言葉には、何かを最大化するという形式的意味と、物質的欲求を満たす過程との関連を示す実体的意味とがあるが、新古典派経済学においては、実体的意味が捨て去られ、形式的意味だけが残されることになったとし、これ

によって、社会の存続を支える物質的・実体的過程が、経済学の理論的分析から追放されてしまった、と批判している（『人間の経済』2章）。

第二に、「稀少性定義」とも関係するが、経済人あるいは経済的行為の規定を転換させた。経済的行為というとき、19世紀の方法論においては、経済的動機あるいは目的が重視されていた。例えば、私的な利益、物的な富の欲望、貨幣によって強さが測定される欲求などによって駆り立てられる行為が、経済的行為と規定された。これに対して、経済的動機という考え方そのものを否定したのが、ウィックステードであった（『経済学の常識』1篇5章）。ウィックステードの考えを継承したロビンズは、経済的行為の概念にとって重要なのは、利己的動機でも富の動機でもなく、さまざまな選択肢の相対的評価ということであり、目的を達成するために合理的に選択を行うということである、と主張した。目的を特定することなく、目的と手段の形式的な関係だけを問題にすることによって、「経済的行為」は社会現象の広範な領域に適用できるようになった。

第三に、ロビンズは「効用の個人間比較」が可能であると考えたピグーを批判したが、これは認識論に関わる問題であった。イギリス経験論の伝統では、われわれの知識は、究極的には感覚と内省（reflection）という二つの源泉から得られる（ロック『人間知性論』2巻1章）。感覚は外的な事物の観察、内省は心の内的作用の観察を意味する。内省は後に内観（introspection）とも呼ばれるようになる。ロビンズは観察と内観という用語を使って、二つの源泉を表している。知識の源泉を外的な事物の観察と内観とに求める認識論によれば、他人の効用、すなわち他人の内的な経験は知りえないものとなる。当然のことながら、「効用の個人間比較」を前提とす

る議論は、経験科学としての基礎を欠くという結論に至る。ロビンズによれば、「効用の個人間比較」は科学の問題ではなく、慣習的な仮定の問題であった。経験的に知りえないものと慣習との関係は、深く追究されているわけではないが、興味深い問題である。

第四に、事実と価値を峻別するとともに、両者の関連について論じた。もっとも、これ自体はロビンズの独創的な貢献というわけではない。「である」と「べきである」の区別は、マックス・ヴェーバーを待つまでもなく、すでにヒュームが指摘していたことである（『人間本性論』3篇1部）。また、政策の目的は経済学の外部から与えられ、科学としての経済学は、その目的を実現するための手段にのみ関係するという見解も、J. S. ミルが示していたものであり（『論理学体系』6篇12章）、19世紀の方法論でも通説であった。ロビンズの貢献は、この通説を繰り返したことにある。「である」と「べきである」の区別に対する人々の鈍感さは根絶やしにすることが難しいものである、とロビンズが考えた点が重要なのである。

第五に、経済法則・理論の性格に関して、アприオリズムあるいは本質主義などと呼ばれる立場を取った。マッハルプは、客観的な感覚経験に訴えることなしに基本仮定が真であると主張する立場をアприオリズムと名づけ、ロビンズの基本仮定は内観に基づくものであるから、同じくこの立場にあると主張した（『経済学における検証の問題』）。しかし、内観に基づくとしても、イギリス経験論の観点からすればこれも経験の一種であるから、ロビンズの立場をアприオリズムと呼ぶのは適切ではない。ロビンズにとって、経験に依存しないという意味でアприオリなのは、基本仮定ではなく、そこから経済法則・理論を導く演繹の部分なのである。ロビンズ自身は『自伝』で、『経済学の本質と意義』初版の立

場は本質主義であったと述べている。本質主義とは、真に科学的な理論は事物の本質を記述するものであるとする立場であるが（ポパー『推測と反駁』3章）、晩年のロビンズは、本書はカール・ポパーという星が地平線上に昇る前に書かれたものだとして、かつての立場を否定した。しかし、本質主義を本格的に反証主義に置き換えるとすれば、部分的な修正では済まないはずである。反証主義の観点から経済学方法論史を概観したブラウグは、第2版も含めて、本書を反証主義とは対立するものと位置づけている（『経済学の方法論』3章）。たしかに、ロビンズによれば、経験的研究の機能は理論をテストすることにあるのではなく、ある与えられた状況に理論が適用可能かどうかを調べること、副次的な仮定を示唆すること（第2版で追加）、説明されずにいる残余現象を示すことにある。経済学において、予測によって理論をテストすることが実際に可能かどうかは別として、テストあるいは反証という観点を本書（第2版も含めて）の中に見出すことはできない。本書は1930年代の著作として、後年の著者の意向とは独立に、そのまま受け止めるべきである

と思われるのである。

本書の「訳者解説」についてみると、かなり異色のものであるという印象を受ける。古典の「訳者解説」というとき、通常は、著者の経歴、その著作の要点、他の著作との関係、学説史上の位置づけ、研究史、現代的意義、翻訳上の方針などを述べることが多いと思われるが、本書の「訳者解説」では、これら以上に「日本におけるロビンズの導入過程」が、補遺として詳しく取り上げられている。それはそれで興味深いテーマであるが、「訳者解説」の役割という観点からすると、バランスが悪いのではないだろうか。

最後に、訳語について述べておきたい。定訳のある用語に独自の訳語を当てたために、読みにくくなったところがあるのは残念である。例えば、uniformity（斉一性）は「統一性」（99）、verify（検証する）は「確証する」と訳されている（122）。とはいえ、けっして分かり易いとはいえない文章の翻訳に当たられた訳者に、敬意を表したい気持ちに変わりはない。

（佐々木憲介：北海道大学）